

吉田城さんの思い出

東 郷 雄 二 Yuji TOGO

吉田城さんが他界されたとは今でもまだ信じられない。信じたくない気持ちはまだ私の中にある。ときどき206系統の京都市バスで大学に出勤する城さんと出会うことがあったが、今でも朝バスに乗ると、こちらに向かってにこやかに手を振る城さんがいるような気がする。それほど唐突で理不尽な亡くなり方だった。死はいつでも理不尽なものであることは百も承知の上なのだが、これほど早く幽明境を異にするとは思ってもみなかった。学生時代から数えて30数年にわたる長いお付き合いをさせていただいたので、城さんをめぐる思い出はたくさんある。

私は1972年の4月に工学部から文学部に文転し、仏文科で学ぶことになったのだが、そこに1学年上の城さんがいた。城さんはすでに秀才の誉れ高く、並み居る仏文科の学生のなかでは一際目立つ存在だった。お父上が英文学者という毛並みの良さと、高校時代からの文学書の耽読により蓄えられた話題の豊富さは、城さんに独特の洒脱な雰囲気を与えていた。東京のお父上と当時フランス語で文通しているという噂があり、私など自分の語学力の未熟さを顧みて嘆息したものである。また城さんはお洒落なことでも有名で、黒革のロングコートにサングラスなどという服装で構内を歩く姿は、当時ファッションの点では世の中の動きに10年は遅れていた京大では異彩を放っていた。

その後、城さんは東大の大学院に進学し、私は京大の大学院に進んだため、しばらく会うことはなかったが、私が1977年秋にフランス政府給費留学生として渡仏し、パリ大学都市に入居するとまた再会することになった。城さんは私より2年前にフランス政府給費留学生としてパリに留学し、最初の一年をユルム街のエコール・ノルマルの学生寮で interne として過ごしたあと、アメリカ館で暮らしていたのである。アメリカ館には後に吉田夫人となる生駒典子さんも後を追うように渡仏して入居していた。アメリカ館は大学都市では珍しく、男子学生の居住区域と女子学生の居住区域が分けられていた。男子区域にある城さんの部屋を訪問すると、訪問客はそのまま女子区域にある典子さんの部屋に連れて行かれたものである。典子さんの部屋はすっきりときれいに整えられていて、客間として使われているらしかった。

とにかく初めてフランスの地を踏んだ私は西も東もわからない状態で、城さんの親切な手引きに大いに助けられた。大学の登録の仕方から学生食堂の使い

方までいろいろ教えてもらった。そうこうするうちに城さんはブルーストに関する大部の博士論文をいち早く書き上げ、私も論文審査の傍聴に出席した。これが大いに刺激となり、私も数年遅れて博士論文を書くことができた。もし城さんの論文審査に出席していたく感銘を受けなかったら、自分が博士論文を書くことはなかっただろう。「学恩」という言葉はふつう教えを受けた先生や、影響を受けた学者に対して用いるものだが、研究生活において啓発された先輩にまで拡張して使うならば、私は城さんにひとかたならぬ学恩があるのである。そして城さんに学恩を被ったのは私一人ではあるまい。周りの人間に影響を与えずにはおかない人であった。

その後、城さんは帰国して大阪大学言語文化部に勤務し、私は少し遅れて帰国したのだが、1980年にふたりとも京都大学教養部（当時）の助教授として同時に採用され、またまた同僚として顔を合わせることとなった。運命の糸はこうして浅からぬ縁を取り結んだ訳である。城さんはその当時すでに『ロワイヤル仏和中辞典』（旺文社）の編纂の仕事をしていて、城さんの推挽で私も編集チームの末席に連なることになった。『ロワイヤル仏和中辞典』は東京大学の福井芳男先生を代表者として1977年頃から計画が開始されていた。私たちが学生として勉強していた当時は、『スタンダード仏和中辞典』（大修館書店）が事実上唯一使える仏和中辞典であり、1978年には画期的な『クラウン仏和中辞典』（三省堂）が世に出ていたが、『クラウン仏和中辞典』は語彙数をしばった学習辞典であり、それよりも本格的な中辞典を作ろうという計画だったのである。しかし、『ロワイヤル仏和中辞典』の編纂は、当初の熱気が一段落すると停滞期を迎え、思うように進捗せず難航していた。執筆陣の強化と新たな血の注入が急務となり、執筆者の一人として私も参加することになった。その背後には、言語学を専門とする人間も加えた方がよいという配慮があったと推察される。言語学者としては、すでに早稲田大学の倉方秀憲氏が計画当初から編集チームの中心におられ、私の後からは大阪大学の畏友春木仁孝が参加し、都合3人の言語学者が加わることとなった。仏和中辞典の編纂では珍しいことであり、このことが少なからず『ロワイヤル仏和中辞典』の辞書としての個性に反映している。辞書として人間が作るものであり、個性が滲みでることは避けがたいのである。

辞書編纂は多大の時間を要し、根気のいる仕事である。代表的なフランス語辞典を横断的に読み比べて原稿を起こすのだが、フランス人を対象とするフランス語辞典の語義説明は語義の定義であるのにたいして、仏和中辞典では日本語の訳語でなくてはならない。適切な訳語を得ることができず長時間宙を睨むことも度々である。また辞書の生命線は用例だが、『ロワイヤル仏和中辞典』は

全文用例を多用する方針であったため、用例を作文する必要に迫られることもあり、これにも多くの時間を取られる。やり始めてみて大変な仕事であることに気がついた時には、時すでに遅しである。その後5年間辞書の仕事にかかり切りになった。しかし城さんは辞書編纂の仕事を楽しむかのように楽々とこなしていた。少なくとも傍目にはそう見えた。終わってみれば原稿執筆量において、城さんはトップだったと記憶する。

最初は原稿執筆が主な仕事だが、慣れてくると人が書いた第一稿をもう一度見直して手を入れる校閲を担当するようになる。城さんは自分で原稿を書く以外に、校閲の仕事も多くこなしていた。仕事が遅い人がいると、その分が城さんの元に回ってくるという具合だったから、彼の仕事量は増加する一方だった。だから『ロワイヤル仏和中辞典』初版として世に出た辞書の中身のかかなりの部分は、城さんが自分で書いた原稿かまたは校閲した原稿である。その仕事量は超人的と言っても過言ではなく、もし城さんが参加していなければ『ロワイヤル仏和中辞典』は、計画の立ち上げから8年という短い制作期間で日の目を見ることはなかっただろう。

旺文社には辞書編纂の編集部がなく、日本アイアールという編集プロダクションに実務を依頼していた。日本アイアールは東京の四谷三丁目のサン・ミュージックの向かいのビルにあり、編集会議があるとそこにみんな集まった。城さんは編集会議がない時でも所用で東京に行くと、日本アイアールに寄ってよく仕事をしていた。辞書の仕事を長くやっていると、眼はかすみ肩は凝り疲労が溜まる。そんな時でも城さんは明るく冗談を言って雰囲気をごまかせる。そんな心配りにどれだけ助けられたかわからない。『ロワイヤル仏和中辞典』は1985年に完成し、翌1986年には学習辞典として『プチロワイヤル仏和中辞典』が刊行された。時間の限られた『プチロワイヤル仏和中辞典』の編集においても、城さんが中心的役割を果たしたことは言うまでもない。城さんには一座の中心となる求心的な魅力と、人を飽きさせない座談の妙技があった。

その後、城さんは文学部の助教授に迎えられて配置換えになり、職場を共にする最も近い同僚ではなくなったが、私は文学部の科目も担当していたので、折りに触れて顔を会わせる機会は引き続きあった。文学部の科目を担当していると、卒業論文の審査を依頼される。なかには余り出来のよくない卒業論文もある。こちらはかなりきつい言葉も交えて批評するのだが、そんなときでも城さんは論文の中で良い部分をできるだけ見つけて誉める言葉を忘れなかった。学生に対する愛情がその根本にあったのだろう。教養部が平成5年に総合人間学部へ改組されると、それまでよりは文学部との関係が薄くなり、城さんと顔

を合わせる機会は以前よりは少なくなっていった。

文部省（当時）の在外研究員として一年間フランスに滞在していた時、体のむくみと異常な疲労を感じて城さんは入院した。以前から、子供の時にネフローゼという腎臓病に罹ったため人より腎臓が弱いのだと聞いていたが、腎臓の機能は見る見る衰えて、遂に人工透析をしなくてはならなくなった。しかし、城さんと交友のある人ならば誰もが知っているように、そんな事情を人に話すときにも決して暗くならず、努めて明るく冗談交じりに話すというのが城さんの人柄だった。透析に時間はかかるけれど、その間に夕食も出るし本も読めるから結構楽なのだと城さんが言うのは、人に心配をかけたくないという配慮と、舞台裏を見せたくないという美学に発する態度だったろう。

このような態度は城さんの生活を通じて一貫していた。フランス滞在中に腎臓病を発症したのも、ブレイヤード版のブルーストの巻の編集を始めとして、たくさんの仕事を抱えていたためである。城さんの超人的とも言える仕事量には常々感心していたが、どれだけ多くの仕事を抱えても、決してそのことで人に愚痴をこぼしたり弱音を吐くことはなかった。それはきっと城さんの美学に反する行為だったのだろう。いつでもダンディーで軽妙な態度を崩さなかった。しかし、本当のところは城さんは努力の人だったのだと思う。他人には見えないうちでいつも努力していた。蒔絵や象眼などの工芸作品で作者の手業の痕跡が見えないものが一級の作品であるのと同じように、舞台裏での努力の跡を人に見せないという美学が城さんにはあった。

しかし長年にわたる透析は確実に城さんの体を蝕んでいた。透析では除去できない老廃物が体内に蓄積するのだという。市バスに乗り合わせたある日、老廃物が溜まって手の関節がもう自由に動かないのだと話す城さんは、いつもとはちがって弱気に見えた。自分の肉体の衰弱を本人がいちばん自覚していたのだろう。透析のためか肝炎を発症して、治療のためにインターフェロンを使っているという話を聞いたとき、周囲はしばらくの入院治療ののちにまたいつもの明るい城さんに会えるものだと思っていた。ところが病状は急変し、私たちは急逝の悲報を受け取ることになったのである。2005年6月25日の夜にお宅に伺ったとき、城さんは布団に寝かされており、お顔はいつもの城さんだったがもうあの笑顔はなく、生命の徴候は消え去っていた。じっとお顔を見ていると、「やあ、東郷君」といつもの明るい調子で声をかけてきそうな気がした。もうあの暖かい笑顔が永遠に失われたとはどうしても信じることができない。

学生時代は一年先輩として、フランス留学中はよく先達として、また教員になってからは同僚として、城さんにはいろいろなことを教えてもらったが、私

の方が得意で教えてあげたことがひとつある。それはパソコンの使い方である。私がパソコンを使い始めた1994年当時は Windows 95のリリース前で、国内のDOS機ではフランス語をまともに使うことができず、Macintoshの方が多言語処理に優れていた。しかしフランスで発売されたソフトを動かそうとすると、システムレベルでのフランス語環境が必要であったため、一台のMacintosh上に日本語版のOSとフランス語版のOSの両方をインストールし切り替えて使うという、今では考えられないような手間のかかることをやっていた。2種類のOSを併存させる作業には少しコツが要る。城さんもMacintoshを自宅に購入してフランス語版のOSのインストールを試みたがうまく行かず、私の家に夜中に電話がかかってきた。駆けつけてみるとパソコンがダウンして困っていたので、私が復旧してあげて大いに喜ばれた。それから何となくパソコンの相談係のような役目を仰せつかり、何度かアドバイスすることがあった。万能選手であった城さんにもささやかな弱点はあり、機械にはあまり強くなかったのである。

嗚呼、城さんの人も羨む才能と長年に亘って蓄積された膨大な学識は、ある夜突如訪れた死の冷たい手によってあなたに持ち去られ、永遠に失われることとなった。残された私たちは、空拳を虚空にかざしてただただそのことを悔やむばかりである。死は完全な終焉であり、人間はいかにしても死を超克することはできないのか。古来繰り返されたこの問いは人間の領分においては答の出ない問いである。もし神がこの世におわすならば、なぜ才能豊かな者を先に召されて、凡愚のわれらを後に残されるのか。問いかけても神は黙して語るまい。つきくさの仮りなる命を曳きゆくわれらにとって、死はこの手で触れることのかなわぬ領分である。せめてこの世で城さんとたまゆらの時間を共有できたことを感謝するのみである。

(とうごう・ゆうじ 京都大学大学院人間・環境学研究科教授)